

Ma L'Amore No <div>けれど恋は</div> Stefano Bollani Trio <div>ステファノ・ボラーニ・トリオ</div>
1. ヒアズ・トゥ・ライフ <div>Here's To Life 〈Butler, Molinary〉 (5:48)</div>
2. 君なしではいられない <div>Se Non Avessi Piu Te 〈F. Migliacci / D. Zambrini〉 (4:49)</div>
3. けれど恋は <div>Ma L'Amore No 〈Galdieri / D'anzi〉 (5:46)</div>
4. アリベデルチ <div>Arrivederci 〈Calabrese / Bindi〉 (4:25)</div>
5. ほほにかかる涙 <div>Una Lacrima Sul Viso 〈Mogol / Lunero〉 (4:32)</div>
6. 話から話へ <div>De Conversa Em Conversa 〈L. Alves , H. Barbosa〉 (4:52)</div>
7. ソノ・コンテンツ <div>Sono Contento 〈A. Britti〉 (6:24)</div>
8. 夢見る想い <div>Non Ho L'eta Per Amarti 〈Pazeri / Nisa〉 (6:06)</div>
9. パラのくちびる <div>Boccuccia Di Rosa 〈A. Testa / G. Cichellero〉 (1:50)</div>
10. 灯りが見えた <div>I'm Beginning To See The Light 〈H. James , D. Ellington , J. Hodges〉 (6:41)</div>

ステファノ・ボラーニ Stefano Bollani 〈 piano & vocal 〉
アレス・タヴォラッツィ Ares Tavolazzi 〈 bass 〉
ウォルター・パオリ Walter Paoli 〈 drums 〉
録音：2004年1月27、28日　ザ・ハウス・レコーディング、ローマ

<p>© 2004 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p> <p>★</p> <p>Produced by Tetsuo Hara . Recorded at The House Recording Studio in Rome on January 27 and 28 , 2004. Engineered by Simone Ciammarughi. Assistant : Michele Zaccagnini. Artist Management : M. G. M. Produzioni Musicali. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Cover Photo : Shinichi Takahashi. Artist Inner Photo : Paolo Soriani. Designed by Taz.</p>

もやったが、ボラーニがこれほど歌うとは。いや、お見それいたしました。ボラーニのヴォーカルは声と歌いまわしが、カンツォーネ歌手ルイジ・テンコに似通っている。モーズ・アリソンとキース・ジャレットの歌唱を思い出す人もあろう。朗々と歌い上げるタイプではなくて、チェット・ベイカーみたいに切々と迫るタイプ。上手か、そうでないかはともかく、ソフトでロマンティックな魅力はなかなかのもの。その歌唱のあとのメロディアスなピアノ・ソロの素晴らしい。実に楽しいアルバムだ。彼はスイング・ジャーナル2002年度ジャズ・ディスク大賞のニュー・スター賞を受賞。

- ヒアズ・トゥ・ライフ　アーティ・バトラーとフィリス・モリチリーが共作。ジャズ・ヴォーカルとピアノのベテラン、シャーリー・ホーンが1991年に録音、これをタイトルにしたアルバムを92年に発表した。“人生に乾杯、もたらされる喜びの一つ一つに。夢見る人とその夢に乾杯”というくあいに夢を追って生きてゆく心意気を綴った面白い歌。ボラーニのモノローグのような歌唱、音をキラキラ光らせてフレーズづくりも楽しんでいるようなピアノ・ソロ、これまた大いに面白い。
- 君なしには生きられない　フランコ・ミリアッチ作詞、ブルーノ・ザンブリーニとルイス・エンリケス・バカロフ作曲。ローマ生まれのミリアッチの代表作には「ヴォラーレ」「ケ・サラ」、そしてザンブリーニとの「あなたにひざまづいて」などがある。エンリケス・バカロフはアルゼンチン出身で、映画『続・荒野の用心棒』の音楽も書いている。この切ないカンツォーネは1965年のカンタジエロ音楽祭でボローニャ生まれのジャンニ・モランディが歌って2位に入賞。

3. けれど恋は　ミケーレ・ガルディエリとジョヴァンニ・ダンツィが、1942年に映画『今夜新しいことはない』のために書き、主演のアリダ・ヴァリ（49年のイギリス映画『第三の男』で有名なイタリア女優）が歌った。ガルディエリはナポリ生まれの作詞家で、代表作に「サンタ・キアーラの寺院」（45年）がある。ダンツィはミラノ生まれの作曲家で、ヒット作に「静けさのスロウ」（40年）などがある。“けれど私の恋はちがう。バラとともに風に散らされることはない…” という強い愛のカンツォーネ。イタリアの名歌手オルネラ・ヴァノーニとアルト・サクスのリー・コニッツが共演した異色盤もある。

4. アリベデルチ　ジェノヴァ生まれのシンガー・ソングライター、ウンベルト・ピンディが友人ジョルジョ・カラブレーゼの書いた詞によって作曲した。“また会いましょう。私たちは愛にたわむれていた。私はあなたから離れる。誠実な友として握手して、また会いましょう”という切ない別れの歌。ピンディ自身のほか多くの歌手が歌って1959年に大ヒット。60年のカトリーヌ・スパーク主演映画『十七歳よさようなら』の主題歌になっている。

5. ほほにかかる涙　ミラノ生まれの作詞家で、「しあわせがいっぱい」「アル・ディ・ラ」などの傑作の多いモゴールが詞を書き、ルネーロが作曲。これはペンネームで、実はリコルディ・レコードの文芸部長イレール・バッタチーニとみられているそうだ。1964年のサン・レモ音楽祭で新人ボビー・ソロがアメリカのフランキー・レインと組んで歌って入賞。ソロのレコードはミリオン・セラーの大ヒット。“君の一粒の涙から全てがわかった。涙とほほえみに、私に恋している君の秘密が見えたのだ”。

6. 話から話へ　ブラジルのリオ生まれ（1925年）の歌手ルシオ・アルヴィスと、同じくリオ生まれ（1915年）の作曲家アロルド・バルボーザが共作。“こんな生活はもう意味がない、どうしようもないんだ。話から話へ続けても、君は別れる理由を探しているようだ”という内容は辛いが、とても軽快なサンバで1947年にヒットした。ジョアン・ジルベルトがスマートに歌った1970年録音のレコードがある。

7. ソノ・コンテンツ　シンガー・ソングライターのアレックス・ブリッティが書き、2001年のサン・レモ音楽祭で歌い、7位に入賞した。当時32歳の彼はブルースが得意な男として知られている。ボラーニたちの演奏はアグレッシヴで迫力十分。

8. 夢みる想い　ナポリ生まれの作詞・作曲家マリオ・パンゼリが詞を書き、ナポリ生まれの作詞家ニーサが作曲した、という奇妙なことになっているが、実はジーン・コロネロが作曲したとの説がある。1964年のサン・レモ音楽祭で、16歳の新人ジリオラ・チンクェッティがフランスのパトリシア・カルリと組んで歌って優勝した。“恋する年ごろではない。あなたと二人になりたいけれど、何も言えない。待っていてくれるなら、私の愛の全てを捧げるその時がきっと来る”。日本でも大ヒットした。ここではボラーニの歌唱はなし。トリオは速いテンポでエモーショナルに快演している。

9. パラのくちびる　同名異曲もあるのだが、これはアルベルト・テストとジジ・ケチレーロが書き、イタリア生まれだがアメリカで歌手になり、1957年に帰国したジョニー・ドレルリが歌ってヒットした。ちょっと古風で楽しい歌。ボラーニたちは陽気にコーラスし、ごきげんにスイングする。テストはブラジルのサントスに生まれた作詞家で、代表作には64年にミーナがヒットさせた「砂に消えた涙」もある。ケチレーロはミラノ生まれの作曲家。

10. 灯りが見えた　1944年にニューヨークのクラブでデューク・エリントン、アルト・サクス奏者ジョニー・ホッジス、トランペット奏者ハリー・ジェームス、作詞家ドン・ジョージが合作。45年にジェームス楽団（歌手キティ・カレン）盤が大当たり。ボラーニ・トリオは各人のソロをフィーチャーして陽気にノリまくる。

（April 2004　青木啓）

このところヨーロッパのジャズが大いに注目され、話題を賑わせている。来日公演やCDアルバム発売が盛んに行われ、聴く私たちも忙しくなってきた。ノルウェーやスウェーデンほか北欧勢の進出ぶりが目覚ましいけれど、先輩格のイタリア勢だって負けずにイイトコロを見せている。特にピアニストに評判のよろしい人物が多い。エンリコ・ピエラヌツィ（1949年ローマ生まれ）をはじめ、スターがかなりいるが、中堅・若手ではダニーロ・レア（1957年生まれ。ヴィーナス・レコードからリーダー・アルバムが出ている）、アントニオ・ファラオ（1965年生まれ）そして本アルバムの主人公ステファノ・ボラーニを代表格として挙げられる。

イタリアのジャズ・ピアニストが日本で話題になり始めたのは、1950年代に入ってからと言っていいだろう。ローマノ・ムッソリーニは、彼の父が“あのイタリア首相”ベニート・ムッソリーニだった、ということから私たちがレコードを聴く前に話題になった。アルマンド・トロヴァヨールは40年代末から活躍していた人で、ジャズとポップの録音は多いが、やがて映画音楽に力を注ぐようになった。ピエロ・ウミリアーニは50年代後半から頭角を現した男で、60年にイタリアを訪れたヘレン・メリルの録音にトランペットのニニ・ロツと参加している。というようなわけで、私たちは少しずつイタリアのジャズとそのミュージシャンを知ったのだが、レコードはあまり入手できなかった。まさしく今昔の感に堪えない……と思う。

さて、ステファノ・ボラーニは1972年5月12日、イタリアのミラノ生まれ。早くも15歳でプロ入りしたという。フィレンツェのケルビーニ音楽院を卒業した後、ポピュラー音楽界で活動しながらジャズ界にも入り、フィル・ウッズ、グレッグ・オズビー、バット・メセニー、ハン・ベニング、ラズウェル・ラッド、トニーニョ・オルタなど様々なジャズメンとの共演で腕を磨き、音楽の幅を広げた。1998年にジャズ専門誌“ムシカ・ジャズ”のニュー・タレント賞を、2000年にジャンゴ賞を授けられている。ボラーニが参加したCDアルバムの数は多く、自身のリーダー・アルバムもすでに10枚を超えた。

ヴィーナス・レコードからは『ヴォラーレ』と『黒と褐色の幻想』（2002年録音）そして『愛の語らい』（2003年録音）というボラーニ・トリオによる3枚が発売されている。そこで本盤『けれど恋は』はヴィーナスにおける第4作となったわけだが、第1作『ヴォラーレ』の続篇、あるいは延長線上の作品と言えるものだ。ご存じの方が多いと思うが、タイトルからもわかる通り第1作はイタリアのクラシックとポピュラー名曲集。ブッチーニのオペラ『トスカ』のアリア「星は光りぬ」、ニーノ・ロータ「映画『甘い生活』のテーマ」、1958年のサン・レモ音楽祭優勝作品「ヴォラーレ」、59年カンツォニッシマ音楽祭でマリーノ・バルレートが歌って入選した「アリヴェデルチ」などなど、題名を見ただけでイタリア物ファンは胸がワクワクする曲が集まり、それらが鮮やかに歌心いっぱいのジャズになっているんだから、もうこたえられない。“歌の国イタリア”のジャズメンが自分の国の“世界的にポピュラー”なオペラや大衆歌謡（カンツォーネ）を演奏することは、アメリカのジャズメンがガーシュウィンのオペラ『ボーギーとベス』とか様々なミュージカル、「スターダスト」などポピュラー・ソングを演奏することと同じだ。そこにイタリア人ならではの、と思わせる曲の扱い方、情緒、雰囲気を感じられるから嬉しい。カンツォーネ愛好家でもある原哲夫プロデューサーは、トランペット奏者エンリコ・ラバの同趣向アルバム『イタリアン・バラッズ』（1996年録音）と、ダニーロ・レアの『ロマンティカ』（2004年）も作っている。

ベースのアレス・タヴォラッツィ、ドラムスのウォルター・パオリとのおなじみトリオによるボラーニの本作は、アメリカ製とブラジル製のナンバー計3曲以外の7曲がカンツォーネだ。しかも今回はボラーニがピアノだけでなくヴォーカルも聴かせるのだから、ますます面白いことになった。サッチモを尊敬するニニ・ロツは時々ヴォーカル